

伊庭想太郎編(1)

光と影

東京農業大学は榎本武揚によって創始され、横井時敬によって実学教育の礎が築かれた。その榎本と横井の間をつないで、重要な役割を果たした人物がいる。伊庭想太郎(1851-1907)である。明治期の光と影が織り成す、その波乱の一生を振り返りたい。

育英会で榎本を補佐

東京・飯田橋の地に、東京農大の萌芽というべき「私立育英黌」が誕生したのは、明治24年(1891)のことだ。設立母体は榎本武揚が会長を務める徳川育英会で、維新後、困窮した旧幕臣の子弟教育が狙いだった。徳川育英会で、幹事長として榎本を補佐したのが伊庭想太郎である。

想太郎は剣術の達人だった。江戸四大道場の一つ、心形刀流の「伊庭道場」に生まれ、維新当時、まだ10代の若者だった想太郎は、静岡で漢学や歴史、数学などの素養を積んだ。文武に秀でたその才能を榎本に見出されたのだろう。

育英黌で榎本は管理長(理事長)に就き、黌長を務めたのは、砲術家として知られる永持明德だった。戊辰戦争では幕府砲兵隊を率いて戦い、維新後は明治新政府の要請で、陸軍整備に尽力している。

農業、商業、普通の3科で発足した育英黌の経営は、決して順調とはいえなかった。農業科だけが存続することになり、設立翌年の明治25年、大塚に移転した。さらに同26年、校名を東京農学校に改めた。

その東京農学校で初代校長に就任したのが想太郎だった。新政府に重用され、逓信相、文相などの要職を歴任する多忙な榎本に代わって、学校経営のすべてを想太郎の双肩が担った。その尽力で、やがて明治農学の始祖横井時敬が招致され、東京農大の創設を迎えることになる。

暗転、凄惨な事件

ここでは、いったん先を急いで、後の想太郎に関わるある重大事件について、触れざるを得ない。明治34年(1901)6月21日、東京市会議所で起きた星亨刺殺事件だ。白昼の、この凄惨な事件の実行者として、想太郎の名は広く記憶にとどめられているからである。

剣術の達人、初代校長



伊庭想太郎

藩閥で揺れる当時の政界にあつて、貧困から身を立てた星は豪腕の実力者だった。その強引な政治手法と金権体質のゆえに、「オシトオル」の異名で恐れられ、新聞からは「公盗」「醜魁」と攻撃されていた。

当時、すでに東京農学校長の職を辞していたものの、日本貯蓄銀行頭取、四谷区会議員を務める名士だった想太郎が、ほとんど面識のない星を斬殺するに到った理由は何か。

社会に衝撃を与えたこの事件について、改めて検証するが、まずは想太郎の生い立ちから、この〈ものがたり〉を書き進めたい。

永持明德(あきのり)(1845-1904)



幕臣の養子。蘭学を学ぶ。幕府遣欧使節団に随行。大砲差図役頭取。維新後、沼津兵学校教授を経て大阪兵学校寮に転出。砲兵中佐。育英黌黌長。東京市議。